

# 「やる気応援奨学金」レポート

## フィリピン留学で視野広げる 英語学習、企業訪問、NGO

法学部法律学科三年 宮脇 啓佑（大阪府立三国丘高校）



私は「やる気応援奨学金」を受給して、二〇一三年の二月末から三月末の一カ月間フィリピンのマニラへ短期留学した。現地では、語学学校に通いながらスラム支援のNGOの活動に参加し、日系広告企業への訪問を行った。

### 留学のきっかけ

「貧しい人を救いたい」。多くの人がそのような感情を一度は抱くかも知れない。しかし、「現実的にどうすれば良いのか分からない」「何が出来るのか分からない」と尻込みし、実際の行動に移せる人は多くない。現時点で自分自身に何が出来るのか確かめるために、「やる気応援奨学金」を利用してフィリピンに短期留学することを決めた。二年次の基礎演習で途上

国の経済格差に特に関心を覚えた私は、実際に途上国に足を運び、現地での生活を通して初めて彼らの抱える社会問題を認識出来ると考えた。留学先に選んだフィリピンはアジアの中でも貧富の差が激しい国である。特に、首都マニラは都市部と郊外の経済格差が著しく、郊外ではさまざまな社会問題が起こっている。自身の目でフィリピンの現状を見詰め、その背景に何があるのか、そしてその状況を変えるためには自分に何が出来るのかを考えるために、私はあえてマニラ郊外のケソン市に赴いた。

### フィリピン留学とは

フィリピンでは英語が共通語で、アジア圏では一番通用度が高い国である。そのため、留学のもう一

つの目的は英語力の向上でもあった。フィリピン留学のメリットは、授業時間の長さ・マンツーマンレッスン・授業料の安さである。欧米に比べて、授業時間が格段に長く、先生と一対一で会話を行うマンツーマンレッスンの時間も十分に確保出来る。その割に授業料は欧米の半分以下で済むので、短期的に集中して英語を学習したい人には最適な環境である。

私はマニラのケソン市にあるC21という語学学校に一カ月間通い、平日の朝九時から夕方五時までは英語学習に集中した。基本的にすべての授業が少人数制できめの細かい指導を受けることが出来たので、語学学校に関しては非常に満足している。ところで、欧米のホームステイ留学と異なり、フィリ

ピンでは寮に住むのが一般的である。語学学校では寮に先生も住み込んで共同生活を送る仕組みだったので、日常的に先生と英会話を行うことが出来た。また、ルームメイトは必ず他国籍で、私は韓国人と一カ月間寝食を共にしたのだが、フィリピン人講師・韓国人ルームメイトとの共同生活を通して彼らの生活習慣や文化を少なからず感じ取って、もめごとのないよう配慮をしながら毎日を過ごした気がする。日本人なら絶対にやらないことを当然のこととして行うので、毎日彼らに驚かされてばかりで、非常に刺激的であったのは言うまでもない。彼らとは留学から半年たった今でも連絡を取り合う仲なので、日本に来た際には東京案内をしてあげたいと思っている。

### 企業訪問に関して

私はフィリピン留学以前から二年次の基礎演習や自主リサーチを通じて貧困ビジネスに興味を持つ

ていた。企業は先進国市場の成熟化・競争の激化によって新たな市場の開拓を迫られる一方で、国際社会は世界の貧困削減に向けて効果的な新しい手法を探している。これらビジネスサイドと開発援助サイドの両者の思惑を酌み取り、ビジネスとして利益を上げつつ、途上国低所得者層の直面する課題をも解決していこうというのが貧困ビジネスである。フィリピンへも日系企業や外資系企業が数多く

参入し、この貧困ビジネス手法を採り入れている。

私は現地日系企業とのコネクションを持ち、企業相手にコンサルティング業務を行っている日系広告企業のオフィスを訪問し、直接社長とお話をする機会をいただいた。その企業は数多くの外資系企業が進出しているマニラ中心部のマカティ市の一画にオフィスを構えており、スタッフの半分をフィリピン人が占めている。そのようなグ

ローバルな企業を訪問し、社長や社員さんとお話をする中で、貧困ビジネスについてだけではなく、グローバル時代に求められている能力やビジネスモデルについても学ぼうと思った。数時間にわたるインタビューを終えて、もちろん貧困ビジネスについてのヒントを得ることが出来た。しかし、最も印象深いのは、社長が日系企業のビジネススピードの遅さやビジョンの甘さ・日本人の若者の能力低下について繰り返し述べられていたことだ。

会社法ゼミで日本のコー

ポレートガバナンスを学ぶ今となっては、日系企業のビジネス問題に関しては社長に賛同しかねる部分もあるのだが、留学当時はとても考えさせられるところが多かった。また、その企業でインターンをしている現地の大学生と話をしても、皆意識が高く、明確なビジョンを持っていた。彼らには自国を何とかしたいという志があり、夢に向かって一生懸命努力をしていた。そんな彼らと接することで、今の自分がいかに非力で、長年日本でぬるま湯に漬かってきたかを思い知らされたし、グローバルに活躍する人材のレベルを感じることが出来た。今回の企業訪問で貧困ビジネスについて学ぶつもりでいたが、社長・現地社員・インターン生とのインタビューを終えて、自身の置かれている現状への危機感にさいなまれ落ち込んだことを覚えている。

### NGOの活動に参加して

前述の貧困ビジネスに関して、私はビジネスのターゲットである貧困層の実情を直接見て、生活の実態を調査したいと思っていた。語学学校のあるケソン市にはスラム地区が多く、スラム支援のNG

Oにも容易にアクセスすることが出来る。そこで語学学校が休みの土日を利用して日本のNGOであるSALTの活動に参加し、スラム地区のカシグラハンビレッジやスモークーマウンテンのあるパヤタス地区へ足を運んだ。スモークーマウンテンでは分別されないまま次々と運ばれるゴミが堆積し、強い日差しの下で化学変化を起している。その強烈な悪臭と暑さの中、再生可能な物を拾い歩き、それを廃品回収業者に売って生計を立てる「スカベンジャー」と呼ばれる人がスモークーマウンテン近くのパヤタスに多く暮らしている。彼らはその日暮らしの苛酷な生活を送り、ごみ山の健康被害に苦しんでいる。また、ごみ山の地盤はもろく、崩落事故と隣り合わせの危険な状態にある。

SALTは彼らの生活支援、学校に通えない子供のエンパワメント事業、女性の収入向上事業を主に行い、将来NGOの援助がなくなるとも自立した生活が送れるように持続可能性のある支援を行っている。私が参加した時期はまさにNGO支援の段階から、住民自立の段階へ移行する途中で、住民た



日系広告企業訪問の際に

ちが自らの手で自身の生活の向上を図ろうとしていた。女性支援事業は、当初は、ごみ拾いに代わる収入源を見付け、生活を向上させたいと願う女性を対象に必要なトレーニングを行い、手芸品の生産・販売のバックアップを図るものであったが、今は生産・販売・トレーニングのすべてを現地のお母さんたちが担い、徐々に規模を拡大させている。子供エンパワーメント事業も、当初SALTが図書館などの学習施設を建て運営を行

っていたが、今は運営も現地の人たちの手で行われている。このように、SALTの活動は実を結びつつあり、今は主に経済的理由で学校に行けない子供たちを支援するため、個人・団体のスポンサーから奨学金を募り、教育支援を行っているのだという。私はこれらの活動の現場に立ち会い、現地の人たちとの交流を行った。彼らにとって私は当事者意識のない「部外者」であるために、嫌な思いをさせるかも知れないと心配したが、

国の人間を理解しておらず、偏見を持つていることを痛感した。このことは個人レベルから企業レベルにまで当てはまると思う。企業にしても、現地でのリサーチが足りていないからこそマーケティングに失敗するわけで、現地の事情を把握した外資系企業が成功しているのである。だからこそ、将来は日系企業で途上国向けのビジネスを行いたいと強く思うようになった。

### フィリピン留学を終えて

一カ月のフィリピン留学でさまざまなことを経験することが出来た。それこそ、日系企業訪問・NGO活動・語学学校はもちろん、街で迷子になって現地の人に助けてもらった経験や店ではったくら

う。また、郊外のスラムから都心のオフィス街、富裕層街へ足を運ぶことで、目に見える経済格差やその背景を感じ取ることが出来た。ただ、英語力や知識面がまだ不十分であり、途上国の学生に比べてハングリー精神もあまりない点が浮き彫りになったが、自身の現状を知るといふ点では収穫があったのかも知れない。

ただ、この原稿を読んでフィリピンに興味を持った人がいれば、十分に準備をして留学に臨んでもらいたい。フィリピンの治安状況は決して良いとは言えない。日本人は裕福と見られ、窃盗・ぼったくりの標的になるので、荷物の管理など注意が必要だ。また、夜の歓楽街は危険なので近付かないことをお勧めする。



カシグラハンにて現地の子供たちと交流

彼らは私を温かく迎え入れてくれて、まるで友人のように接してくれた。訪れる前は「スラム＝暗い場所」と決め付けていたが、彼らは陽気で明るく、生きる希望にあふれていた。変な固定観念を抱いていた自分が馬鹿らしくなったし、彼らと私は同じ一人の人間だと思知らされた。子供たちは皆街を良くしたいという明確な夢を持っていたし、輝いて見えた。

このNGO活動に参加して、もちろん貧困層への支援の必要性を感じたが、それ以上に私たちが彼ら途上

国の人と同じ生活を目指したため、おなかを壊したり、少し危険な目に遭ったり前のもと思う自分を少し変えることが出来たように思

留学を終え半年以上たった今になってようやく、当時フットワーク軽く、さまざまなことにチャレンジしておいて良かったと思う。今何かにチャレンジしようかどうか悩んでいる人がいるなら、自信を持って背中を押してあげたいと思う。法学部の「やる気応援奨学金」はチャレンジ精神旺盛な学生のためにあるので、ぜひ応募してみてほしい。